
スマドラバトルロワイヤル

マリオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマドラバトルロワイヤル

【Nコード】

N7905H

【作者名】

マリオ

【あらすじ】

始まったのは、バトルロワイヤル。殺し合い。果たして誰が生き残るのか…

第1話 突然に＋現在の状況

目が覚めると、見知らぬ部屋にいた。みたところ教室らしい。薄暗く、銃を持った警備兵が部屋の隅に4人居た。

首にひんやりとした感触がする。

どうやら首輪を付けられているらしい。

「兄さん！」

聞き覚えのある声。ルイーダ。

マリオ「ルイーダ、ここはどこだ？」

ルイーダ「分からないよ、ピーチ姫やキノピオ達もいるよ」

マリオ「一体何が……」

他にも、キツネのような生物（あれは人間なのか！？）や、翼を生やした天使のような人までいた。

そこへ、見知らぬ白い手袋が現われた。

異様なほどでかく、気絶してしまいそうだった。

「やあ、みんな。目が覚めたかね」

すると、帽子をかぶった少年が言った。

「一体これはなんなの？」

手はフツと笑い。耳を疑うような事をいった。

「今から皆さんに、殺し合いをしてもらうよ」

！！！！

「ルールは簡単。これからこの51人はこの島で1人になるまで殺

し合ってもらっ。

タイムリミットは3日間。その首輪は3日間を過ぎたり、決められた禁止されたエリアに入ったり、無理矢理外そうとしたり、島から出ようとしたり、最後に死んだ奴が死んでから24時間以内に死者がでないと爆発するから注意してくれ！

優勝すれば、無事に元の世界に帰して、一つだけどんな願いでも叶えてやる」

ルールを説明する手袋の顔は本気だった。

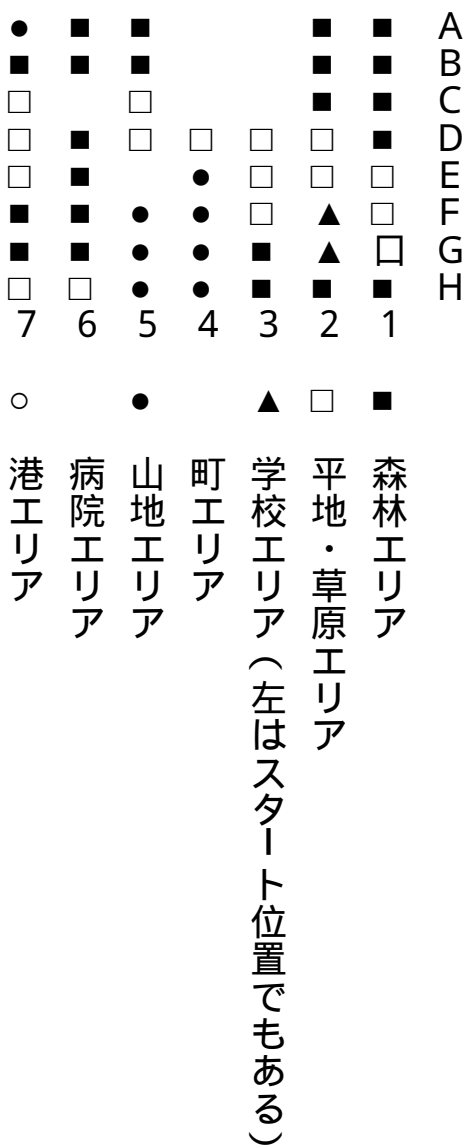
「まずは道具や武器が入ったザックを渡すからな。でも武器はランダムで、ハズレもあるが、その時は諦めな。貰った奴から教室から出て行ってくれ」

ますます訳が分からない。

他の奴らは逆らわない。逆らったら殺されると思っているからだ。中には不気味に笑っている奴もいる。

「では、ゲームスタート！」

MAP



出場者

―参加者・現在の生存者―（なお、他のシリーズの参加者とは初対面、また、ネス達とリユカ達も同じ）

「マリオシリーズ」マリオ。/ルイージ。/ピーチ。/デ이지ー。/クッパ。/ヨッシー●/

キノピオ。

「カービィシリーズ」カービィ。/メタナイト。/デデデ。/エスカルゴン。/ドロツチェ。

「ゼルダの伝説シリーズ」リンク。/ゼルダ。/ガノンドロフ。

「ドンキーコングシリーズ」ドンキー●/デイドー。/デイクシ

ー。
「スターフォックスシリーズ」フォックス。/ファルコ。/スリッ

ピー。/ウルフ。/

クリスタル。

「マザーシリーズ」ネス。/リユカ。/ポーラ。/ジェフ。/クマトラ。/ダスター。

「ポケモンシリーズ」サトシ。/タケシ。/ピカチュウ。/ルカリオ。

「ファイアーエムブレムシリーズ」マルス。/ロイ。/シーダ。

「レトロゲーム」ピット。/ポポ●/ナナ。

「ドラえもんシリーズ」ドラえもん。/のびた。/ジャイアン。/しずか。/スネオ。/出来杉。/

先生。/スネ吉。/のびママ。/のびパパ

。/はるお●/安雄。

計51名

【参加者の現在位置】

マリオ	E	6
ルイージ	C	2
ピーチ	H	6
デイジー		
クッパ		
ヨッシー	H	6 (死亡確認)
キノピオ	G	4
カービィ		
メタナイト	B	1
デデデ		
エスカルゴン		
ドロツチエ		
リンク		
ゼルダ	G	2 / 本館2階教室
ガノンドロフ	H	5
ドンキー	G	4 (死亡確認)
デイディー		
ディクシー		
フォックス	C	2
ファルコ		
スリッピー	E	6
ウルフ		
クリスタル		
ネス	E	8
リュカ		
ポーラ		
ジェフ		
クマトラ		

ダスター	
サトシ	A 7 / 山小屋
タケシ	
ピカチュウ	
ルカリオ	G 4
マルス	
ロイ	
シーダ	
ピット	
ポポ	G 2 / 本館2階教室（死亡確認）
ナナ	
ドラえもん	H 8 / 灯台の展望台
のびた	A 7 / 山小屋
ジャイアン	B 6
しずか	
スネオ	G 2 / 本館2階教室
出来杉	B 6
先生	
スネ吉	A 4 / 民家内
のびママ	
のびパパ	
はるお	C 2（死亡確認）
安雄	
【残り 47人】	
【現在の時間 AM 7:40】	

第2話 ゲームスタート

「む……」

森の中で、メタナイトは目を覚ました。殺し合い。ふざけている…
身を守るものを探す為、ザックを探ったメタナイトは2つアイテム
があることが分かった。

一つは空気砲という空気の弾を発射する銃らしい。いちいちドカン
と言わなければ
ならないのか……。

もう一つはエラチューブ。30分間水の中でも泳げるといいうのだが、
自分には鼻がないので無意味だった。

今は朝の6時。少し寒いくらいでちょうど良かった。

しかし、あの手。何を考えているんだ……

単なる遊びなんだろうか。いや、あの目は本気だった。

一体何者なんだろうか、もしかして新手の敵かもしれない。

このゲームに乗ったものは何人かいるだろう。願いを一つだけ叶え
られるというのだからな。

だが、願いが叶うよりもあんな危ない奴を放っておく方が危ない。

このゲームにはカービィも参加させられていた。大丈夫だろうか…
…。

あれこれ考えているうちに自分が気まづくなってきた。

仕方ない。カービィや陛下達を探すしかないのか…。

空気砲を小さい腕にはめ（自分には首が無いので左手に腕輪が付け

られている）、
カービィ達を探す事にした。

【メタナイト／星のカービィシリーズ

健康状態：健康

装備：空気砲（残り5発）

所持品：支給品一式・エラチューブ（残り30分）

現在位置：Bー1

基本行動方針：カービィ、デデデ達を探す

第一行動方針：見知らぬ参加者には注意する

第二行動方針：身を守る道具を探す

最終行動方針：ゲームをやめさせる

備考：参加しているのはアニメ版のメタナイトです】

第3話 天才の野望

「……どうやら病院みたいだな」

病院の一室で目覚めた出木杉。教室を出ようとしたら、また光に包まれて、

ここで目が覚めたのだ。

あの教室に来る前は学校から帰る途中だった。

確か今日のテストは98点。10回連続で95点以上取ったら新しい勉強セットを買ってくれるという約束だ。そして今日は連続で10回目。

折角新しい勉強道具が買えたというのに……。

出木杉に怒りが込み上げる。

まあいい。優勝すればしずちゃんだけを生き返らせ、2人で一緒に……。

……未来は変わる事がある。ドラえもんが言っていたな。

自分のザックを見ると、コルトパイソンと、その弾薬が入っていた。出木杉「ふつ、当たりだな」

他には何も無かったが、支給されたコンパスに参加者名簿。

食料のパンや水は3日分入っていた。

支給品を確認した後、自分のポケットに拳銃を入れ、早速病室を出た。

まずは薬品庫を目指す。役に立つ薬を探すためだ。

廊下へ出ると前、右、左に道が続いていた。

とりあえず、1階の受付に向かって、マップを探す事にした。
号室から見て、ここは3階みたいだ。今いたのは307号室真ん中
辺りらしい。

そばにある階段を使い、別の参加者に気をつけながら1階へと向か
った。

出木杉「（薬を取ったら、しずかちゃんを探すか……）」

【出木杉ノドラえもんシリーズ

健康状態：健康

装備：コルトパイソンノ残り6発（弾薬18発）

所持品：支給品一式

現在位置：C―6

基本行動方針：しずかを探す

第一行動方針：アイテムの搜索

第二行動方針：しずか以外の参加者は誰だろうと殺す

第三行動方針：不意打ちに注意する

最終行動方針：優勝して、しずかちゃんだけを生き返らせる

備考：この決心は、しずかでも戻す事は難しそうです。】

第4話 最初の犠牲者

G-4。高い丘のようになっている山脈地帯だ。

そこに微妙に場違いのゴリラらしき人物が、山の上の方を目指していた。

ドンキー「くそう、早くジャングルに戻りたいんだがな……」

彼は、大好物のバナナを食べようとした時に、光に包まれ、ここまでやって来たのだ。

なので、多少のイライラがドンキーを焦らせていた。

その時、自分が向かおうとしている山の頂上から、見覚えのない声が聞こえた。

「おい、こっちこっち！」

ドンキー「えっ？」

その瞬間、馬鹿でかい機械音が聞こえたかと思うと、ドンキーのいた所が大爆発を起こした。煙が晴れてくると、そこにドンキーの姿はなかった。

その時、山の頂上ではキノコ頭の小柄な男の子が、ロケットランチャーを構えていた。

マリオシリーズのキャラ、キノピオだ。

キノピオ「フッフッフ、まずは1人……」

1人言を言い放った後、ハアッ！と言いながらドンキーのいた場所に着地した。

頂上からここまで10メートルほど高かったが、なんの故障もなかった。

キノピオは黒こげたザックの中を探り、手榴弾3個と出血止めを2錠自分のザックに詰め、
山を下山していった。

その一部始終を、山のふもとから見届けた者がいた。

彼は、波動でこの邪悪な心を辿ってきたのだ。

ルカリオ「ふむ、キノピオという奴は危険だな。気をつけなくては……」

参加者名簿にキノピオの顔と名前が書かれていた。

彼は、名前が書かれている所の下側に、赤いボールペンで、「危険」と書き込んだ。

ルカリオもキノピオが下山してくるのを察知し、
この場から離れる事にした。

【キノピオ／マリオシリーズ

健康状態：健康・狂気状態

装備：ロケットランチャー／残り1発

所持品：支給品一式・手榴弾／3個・出血止め／2錠

現在位置：G―4

基本行動方針：出会った参加者は、誰だろうが殺す

第一行動方針：武器の搜索

第二行動方針：体力を出来る限り温存

最終行動方針：優勝して、キノピオ城を建設する

備考：狂気に満ちているので、彼に近づくと危険です。】

【ルカリオ／ポケモンシリーズ

健康状態：健康

装備：なし

所持品：支給品一式・木バット・野球ボール／5個（いずれも本人確認済み）

現在位置：G | 4

基本行動方針：ピカチュウを探す

第一行動方針：マードーに注意

第二行動方針：別の参加者にキノピオが危険な事を知らせる

第三行動方針：知らない参加者は一応注意しておく

備考：キノピオをマードーと認識しました。】

【ドンキー／ドンキーコングシリーズ 死亡確認

所持品：支給品一式・残りはキノピオが回収】

【残り 50人】

第4話 最初の犠牲者（後書き）

キノピオ……

第5話 ネスの思考

学校からかなり離れた平地で、赤い野球帽の少年、ネスは悩んでいた。

あの白い手、一体何が目的だ。

こんな事をして何の得があるんだろうか。
もしや、政府がこの法律を？

……違う、このゲームには別世界の参加者もいた。

それはまずありえないだろう。

さつきは家族と食事をする時だった。ママの手作りハンバーグを食べようとした時だ。

いきなり意識が無くなって、気づいたらあの教室にいた。

突然の現象に驚きはしたものの、空間転移を自在に操る彼にとって別に

不思議なことでもない。

先程彼と一緒にいた少女は別の場所へ飛ばされたく、傍らにその大きな

リボンは見えない。

それどころか、辺りを見回せど人の姿は一切なかった。

まず心配するのは、一緒に戦った仲間だ。

ざっと地図を眺めたところ、この島にはそこそこの広さがあるようだ。

寂しがり屋のリボンの少女、ポーラからテレパシーがこないところだと、一部の超能力は封じられていると見て間違いない。（危険な目に遭っていないればいいんだが……）

しかも首輪がある為、不用意にテレポートを試みる気にはなれな

った。

また、P S Iを唯一もたないジェフは、自分を超える頭脳の持ち主。彼も大丈夫だと信じたい。

ひと通り考えた後、ネスはザックの中身をチェックし始めた。

記憶に間違いが無ければ、中には武器となるグッズが収められている。

（アイテムでもいいのだが、グッズの方が親しみやすい）

思いつきグッズを引っか抜いてみると、ボクサーがはめる赤いグローブだった。

ただのグローブではないと思い、説明書を見ると、

「このグローブは、自分の思うようにパンチが出来ます」と書いてあった。

なるほど、敵の対処にはもってこいだ。早速はめてみる。

……なんだか全身に力が湧いてきた。いまずぐ飛んでいけそうな気分だ。

他には防弾チョッキがあったが、あまりにもネスの体には大きすぎた。

あとは、先程見た地図の他にコンパスや照明器具などの生活用品や水の入ったボトル、食料のパン類が収められていた。

最低限のサバイバルに必要な物資が揃っている。地図によれば町も存在し、野宿を嫌う者も住に困らない。（集まりすぎたら危険だが……）

今いるのはEー8。少し高い位置の平野だ。

とりあえず、付近のエリアで他の参加者を探すしかなかった。

帽子を深く被り直し、彼は歩き出した。

【ネス／マザーシリーズ

健康状態：健康

装備：パンチグローブ

所持品：支給品一式・防弾チョッキ

現在位置：E―8

基本行動方針：付近のエリアを探索

第一行動方針：ポ―ラ、ジェフを探す

第二行動方針：他の参加者を探す。怪しい人物には要注意

第三行動方針：首輪の解除、島の脱出方法を探る

最終行動方針：主催者を倒す、ゲームを止めさせる

備考：防弾チョッキは、子供には着れないようです】

第6話 狂気

ドゴツ！！

鈍い音とともに、お金持ちの子供、スネオは倒れた後、さらに誰かに首を絞められる。

その子供は青い防寒服の男の子、ポポだった。

スネオ「くそっ！」

抵抗しても中々手は外れない。ものすごい力だ。子供とは思えない。余程狂っているのだろう。無理も無いか……。

しかし、抵抗もむなしく、どんどんスネオの意識は薄れていく。くそ、ここで死んだらスネ吉兄さんに合わせる顔が無いな……

もうだめかと思ったその時、またもや鈍い音が部屋に鳴り響いた。スネオの首を押さえていた彼は、力なく倒れた。そこでスネオの意識は途切れた。

ポポを攻撃した人物は、ハイラルの王女、ゼルダだった。

彼女は、たまたまこの場面を見かけて、そばに落ちていたバイオリンを拾って、
思いつきり殴ったのだ。

ゼルダ「あ、危なかった……」

罪悪感があったが、乗る気の無いものが殺されるのは彼女にとって悲しかったのだ。

とりあずゼルダは、スネオが目覚めるまで、ここに居ることにした。

待っている間に、彼は思考を整理する。

そもそもこんな事をする意味はあるのだろうか？

何のために？ただの気晴らしだろうか？

……一番心配なのはリンクの事。彼なら大丈夫でしょうけど、ガノンドロフの事もある。しかし、彼はもう封印されたはず。もしかして誰かに封印をとかれた。としか言いようが無い。

心当たりは無いけれど、もしかしてあの手という可能性もある。

ここは学校の2階。スタート位置も学校の教室だったが、果たして同じ学校かは分からない。

結論は、この狂気と化したゲームを止めさせる。それだけだった。

【スネオノドラえもんシリーズ

健康状態：気絶

装備：なし

支給品：支給品一式・ゴルフクラブ・ゴルフボール／10個（本人確認済み）

現在位置：G-2 / 本館2階教室

基本行動方針：不明

第一行動方針：不明

第二行動方針：不明

第三行動方針：不明

最終行動方針：不明

備考：当分は目を覚まさないようです】

【ゼルダ／ゼルダの伝説シリーズ

健康状態：健康・不安

装備：バイオリン／耐久度9（ポポから回収）

支給品：支給品一式・救急セット／ばんそうこう×3／包帯1m
／救急スプレー×2

現在位置：G-2／本館2階教室

基本行動方針：この男の子の所にしばらく居る

第一行動方針：意識を取りもどし次第、できれば一緒に行動

第二行動方針：リンクを探す

第三行動方針：ガノンドロフに警戒

最終行動方針：ゲームの阻止

備考：バイオリンの耐久度は0になると壊れます。また、それは
しずかのもです】

【ポポ／レトロシリーズ 死亡確認

所持品：支給品一式・バイオリンはゼルダが所持】

【残り49人】

第7話 別世界の住人

山小屋の中で2人は意気投合していた。
どちらもゲームには反対らしい。

それは、のんびり少年のび太と、ポケモントレーナーのサトシだ。

サトシ「とりあえず、こんなゲームをやるのは絶対にいけないと思う」

のび太「うん、僕もそう思う。悪い奴に優勝させられたらおしまいだよ」

サトシ「ああ、ところでのび太の支給品は？」

あ、忘れていた。のび太は急いでザックを確認する。
出てきたのは、虹色のボールと、マシンガンと、そのマガジンだった。

サトシ「おお、すごいな」

のび太「ところでサトシの支給品は？」

サトシ「フフ、俺のはな……」

ジャジャン！それはうさみみだった。

のび太「な、なあに、これ？」

サトシ「えーっと、説明書によれば体が軽くなって、早く走れたり高く飛べるんだって」

どうやらスマブラのアイテムのうさみみのようだ。

サトシの支給品はそれだけだった。

のび太の虹色のボールは、スマッシュボールで、それはサトシにあげた。

その後、情報交換をした。

仲間の事。脱出方法の事など。

のび太「なるほど、タケシっていう人と、ピカチュウっていうポケモンなんだね」

サトシ「ああ、のび太はこの人達だね」

名簿に指を差して言う。そこにはドラえもんやしずかなどの名前と写真が書いてあった。

のび太「とりあえずこれからどうする？」

サトシ「うーん、そうだな、しばらくここにいるか」

のび太「そうだね」

【サトシノポケットモンスターシリーズ

健康状態：健康

装備：なし

所持品：支給品一式・うさみみ・スマッシュボール

現在位置：A-7ノ山小屋

基本行動方針：のび太とともに行動

第一行動方針：タケシ・ピカチュウを探す

第二行動方針：マードーに注意

最終行動方針：ゲームからの脱出

備考：うさみみは壊れるまで使えます。（使っただけでは壊れません）】

【のび太ノドラえもんシリーズ

健康状態：健康

装備：イングラムM10/30発（マガジン30発×2）

所持品：支給品一式

現在位置：A-7/山小屋

基本行動方針：サトシとともに行動

第一行動方針：ドラえもん達を探す

第二行動方針：武器や道具の搜索

最終行動方針：ゲームの阻止

備考：少し眠気があります。】

第8話 決意

灯台に着いた青いネコ型ロボット、ドラえもんは早速ザックの中を探り始めた。

でてきたのは顔のあるキノコが2つ。少し気味が悪い。

説明書には、一定時間体が巨大化します。2つ同時に食べるとさらに巨大化します。と書いてあった。

しかし、2つ食べようとは思わない。へたにでかくなって誰かが気づき、

元に戻ったときに来てしまったら元も子もない。

とりあえず、誰かのアイテムを奪わなければ……

ドラえもんは考えた。優勝すればなんでも願いが一つ叶うと思っていた。

それが本当ならドラ焼きが何個も食べられる……

そう考えただけでさらに優勝したくなってきた。

しかし、優勝すれば生き返らせることが出来る。

ただ、優勝するにはのびた、のびママ、のびパパと戦わなくてはならない。

しかし、優勝するにはそうするしかない。

そう、生き残るにはこれしか手段が無いのだ。

それとも誰かに任せるか、そうだ。自分は適当にうろつきながらエリア内をうろつき、自分はマードーではないと主張すればいいのだ。

さてよ、主張しても逆に怪しまれる。

……ならば普通に否定すればいいのだ。簡単なことだ。

そして、ドラえもんは決心した。

足をしっかりと踏みしめ、階段を下りた。

大好きなドラ焼きを思う存分食べるのだ！それが願い。それでした。
だった。

【ドラえもん／ドラえもんシリーズ

健康状態：精神に少し疲労

装備：なし

所持品：支給品一式・パワーアップキノコ×2

現在位置：H-8 / 灯台の展望台

基本行動方針：適当にマップ内をうろつく

第一行動方針：自分は乗っていないものになりすます。

第二行動方針：なにか役に立つものをさがす

最終行動方針：優勝して、ドラ焼きを思う存分食べる

備考：その決心は簡単には消えないようです。】

第9話 やってしまった（前書き）

少し流血あります。

第9話 やってしまった

ルイージはある人物と対峙していた。

後ろからいきなり襲い掛かってき、後頭部を殴られたのだ。

とっさに支給品の紙飛行機を使おうとしたが、何の役にも立たなかった。

「ふっふっふ、これでおしまいだな」

小学生にしては体重が重すぎるはおは、支給品の剣を構えてルイージに

一歩一歩近づいていく。

ルイージは足が思うように動かせず、動く事ができない。

ルイージ「あ……ああ………」

着々と死は迫っている。そう思ったルイージは、思わず叫んだ。

「うわああああああああああああああ……！」

はるお「な………！！」

そこでルイージの意識は途切れた。

数分後、目を覚ましたルイージは、驚きの光景を見た。

それは、血だらけのはるおだった。
何箇所か斬られた跡がある。

ルイージ「！！！」

ふと手に感触を感じた。

見ると、自分は剣を握っている事が分かった。
しかも、真っ赤な色の……

それがルイージにはかなりの恐怖だった。

ルイージ「あ、あ、あ……」

まさか自分がやったのかもしれない。
もしくは誰かが……

いや、この辺りに気配は無かった。だから自分がやった。

……と考える時間は無く、剣を捨てて走った。
頭がいたいのも気にせず、

訳が分からなくても走った。

どこまでも……

その頃、ある人物がはるおを見ていた。
その人は、あきらかにゲームには乗るつもりはなかったが、

これを見て完全にゲームに乗ったものがあるという事を確信できた。
もしかしてまだ近くに居るかもしれない。

と思いながら、フォックス・マクラウドは、周りを見ていた。

フォックス「（まだ暖かい。すると死後3分だろうか……）」

自分の勘を想像しながら、彼はまだ濡れていない支給品を取り出し、
パンを1個だけつめた。

こんなところを誰かに見られたら完全に乗っているものと思われる
しまう。

なので、さっさとここを立ち去る事にした。

【ルイージ/マリオシリーズ】

健康状態：後頭部負傷・恐怖感・罪悪感

装備：なし

所持品：支給品一式・紙飛行機/残り4羽

現在位置：C-2

基本行動方針：とにかく逃げる

第一行動方針：今の事を忘れる

第二行動方針：兄さん（マリオ）と合流

最終行動方針：ゲームからの脱出

備考：かなりの罪悪感でいっぱいです。】

【フォックス/スターフォックスシリーズ】

健康状態：健康・不安

装備：レイガン/残り20発

所持品：支給品一式・パン（はるおの物）・レイガン/残り20発

現在位置：C―2

基本行動方針：スタッフオックスグループとの合流

第一行動方針：C―2エリアから離れる

第二行動方針：少年を殺した犯人を捜す

第三行動方針：仲間を集める

最終行動方針：全員でゲームからの脱出

備考：レイガンは2丁あります。」

【はるおノドラえもんシリーズ 死亡確認

所持品：支給品一式（パン一個はフォックスが回収）・KATA

NA（C―2に放置）

【残り 48人】

第10話 サバイバルの知識

「フムフム、参加者は僕を入れて51人。3日間では丁度いい人数だ」

彼は、思考を隅々まで探っていた。

つまり、サバイバルの基礎を思い出しているのだ。

彼自身本格的なサバイバルはやった事がないので、かなり興奮しているのだ。

彼の名前はスネ吉。大学生で、スネオのいとこだ。

サバイバルゲームは何度かやった事があるが、

今回は本物の殺し合い。夢ではないのだ。

今、彼は基礎を徹底的に思い出している。

まず大切なのは食料。確かに3日分入っているが、もしものためにもう少しは持つておかなくてはならない。

続いて支給品。自分は地雷2個と手榴弾3個が入っていた。

できれば銃器がほしかったところだが、これだけでも十分だ。

続いて参加者。基本的にはマードーは必ず数人はいる。

我を失い攻撃してくる者や、乗っていないものになりすまして、隙を見て殺す者。

または自分は手を下さず、自然に数が減るのを待つ者……

どれにせよ、参加者には注意しなくてはならない。

後はエリア。禁止エリアも発表され、そこへ行けば自殺行為だが、間違って入ることも

ありえなくもない。これは特に気をつけなくてはならない事だ。

後は、スネオの事。彼にはもてるだけの知識を叩き込んだから大丈夫だろう。

今いるのは民家の中。一部屋しかない小さな部屋だが、身を潜めるのにはうってつけた。

自分が思うに、もう1人ぐらいは死者が出ているだろう。

ゲームが始まって1時間ほど経つが、これほど時間の経ち方が遅いとは思わなかった。

そう。ゲームはまだ始まったばかりだった。

【スネ吉ノドラえもんシリーズ

健康状態：健康・少し興奮

装備：なし

所持品：支給品一式・地雷／2個・手榴弾／3個

現在位置：A―4／民家内

基本行動方針：民家で身を潜める

第一行動方針：武器の節約
第二行動方針：とりあえず他の参加者には注意
第三行動方針：もう少し知識を思い出す
第四行動方針：スネオと合流
最終行動方針：ゲームの優勝
備考：積極的には行動しません。」

第11話 襲撃

病院の近くの林で、いかにもガキ大将のような男の子は歩いていた。それはまぎれもなくジャイアンだ。

ジャイアン「全く、こんなゲームなんかより歌を歌う方がよっぽどいいってのに……」

彼はクラスの中では一番の存在だ。

もしかしたらゲームに乗っていると仲間から思われるかもしれないが、

そんなものよりリサィタルで自慢の歌声を披露するほうが断然良い。

とにかく今はここから脱出しなければならない。

まずは仲間を集めなくては……。

その時、ジャイアンの頬に一筋の赤い線ができた。

それは明らかに血だった。

「おっとオ、外したか」

ジャイアン「何のまねだ、出木杉」

頬の血を拭き取り、支給品の機械を出す。

出木杉「フフ、しずかちゃんを守るためならこんな事だってするさ」

そっついながらコルトパイソンの銃口をジャイアンに向ける。

ジャイアン「こいつ、狂ってやがる……………」

出木杉「狂ってなんかいないよ。ただ……………」

ジャイアン「……………」

場に緊迫が迫る。そして――

出木杉「ただ優勝したいただけだアアアアア!!」

バアアアン!!

ジャイアン「そういうのを狂っているっていうんだよ……………」

出木杉が銃を撃つ前にジャイアンは取り出した機械を使っていた。
撃った弾丸は跳ね返り、出木杉の脇腹をかすった。

出木杉「ぐはっ! ……く……………そ……………」

出木杉はその場に倒れこんだ。
死んだのではない。気絶したのだろう。

ジャイアン「全く、だから嫌なんだよ。それにしても俺の支給品がリフレクターでよかった」

そう、支給品はリフレクターだったのだ。

特定の攻撃を跳ね返す事ができる優れものだ。

ジャイアンは出木杉の支給品であるコルトパイソンを取り、襲撃できないようにしてやった。

これで少しは安全だと思うが……………

様々な思いを残し、ジャイアンは林の出口へと向かった。

【ジャイアン／ドラえもんシリーズ

健康状態：頬にかすり傷・複雑な心境

装備：リフレクター

所持品：支給品一式・スコープ／100%・コルトパイソン／4発（弾薬18発）

現在位置：B―6

基本行動方針：安全な仲間と合流する

第一行動方針：のび太達と合流

第二行動方針：危険な参加者に注意する

第三行動方針：一応出木杉に注意

最終行動方針：全員でゲームからの脱出

備考：出木杉をマードーと認識しました。】

【出木杉／ドラえもんシリーズ

健康状態：気絶

装備：なし

所持品：支給品一式・きずぐすり／2個・いいきずぐすり

現在位置：B―6

基本行動方針：しずかを探す

第一行動方針：アイテムの搜索

第二行動方針：しずか以外の参加者は誰だろうと殺す

第三行動方針：不意打ちに注意する

最終行動方針：優勝して、しずかちゃんだけを生き返らせる

備考：薬以外はジャイアンに回収されました。】

・ B―6 付近に銃声が響きました。

第11話 襲撃（後書き）

次回！ゲームに参加させられていない者たちは……

第12話 始動！

参加者がゲームで戦っている時、スマブラメンバーの城では他のメンバーが起き始めていた。

参加していないのは、ワリオ、トゥーンリンク、サ姆斯、ロボット、オリマー、ファルコン、
レッド（ポケモントレーナー）、プリン、アイク、ウォッチ、スネーク、ソニックだ。

一番最初にその異変に気づいたのはアイクだ。
彼はちょうどメンバーがいるであろう広間に向かった。しかし……

アイク「ああ？誰もいないじゃねえか」

食堂やトレーニングルームに行ってみたが、どこも影一つ無かった。
気味が悪くなったアイクは、メンバーの個室を探した。

マリオシリーズは全くいなかったが、ワリオの部屋には人の気配がした。

開けてみると、やっぱりワリオが寝ていた。

アイク「やっといたか……」

それに気づいたのか、ワリオが目を覚ました。

ワリオ「よう、アイク。どうしたんだ。死にそうな顔して」

アイク「あ、ああ。実は……」

その後、参加していない12人が広間に集結した。

ソニック「ヘイ、一体何事なんだ？」

アイク「分からないんだ。とりあえずこれを見てください」

リモコンのスイッチを押し、テレビの電源がつく。

画面では、ニュースキャスターが深刻な顔で喋っていた。

『3月20日未明、東京都練馬区で失踪事件が起きました』

画面が練馬区であろう場所に変わる。

『付近の子供、大人が一夜にして消えるという不可解なものです。
ええ、消えたのは。。。小学校の野比のび太さん、源――』

ここでアイクは画面を消した。

アイク「これは別の島のニュースだが、こっちのニュースでも
俺達の仲間が消えたというニュースが放送されていた」

レッド「そんな……」

ファルコン「みんなはどこに消えたんだ？」

アイク「さあな、分からない……」

トゥーン「……………」

アイク「だから、

これからもう1人の被害者達のところへ行こうと思う」

スネーク「ふむ……………」

その時、入り口のドアがぐにやりと曲がる。

恐らく報道陣らがインタビューしに来たんだろう。

オリマー「あ!」

ドアは折れるすんぜんまで曲がる。

報道陣の大群がおしよせるのも時間の問題だろう。

ロボット「このままではまずいデス!」

アイク「よし、ワープ装置を使い!」

サムス「分かったわ、みんな急いで!」

突然の出来事に、メンバーは戸惑うが、
成り行きでワープ装置へと駆けていった。

ドガン！！

嫌な音、それはドアがついに倒れた音だ。

それと同時にありえないほどのマイクを持った人や色んな人達が侵入してきた。

「メンバーはどこだ！？」

「隅々まで探せ！」

「いた、あそこだ！」

レッド「このままじゃまずいよ、装置はまだなの！？」

装置の設定をしているロボットは、焦っていて、操作に混乱していた。

もうすぐ近くまで報道陣が迫ってきている。

このままではひとたまりも無い。

スネーク「ロボット！」

ロボット「分かっていマス！ えーっと、エイ！」

ワイプ装置が発動するのと報道陣が飛び掛るのはほぼ同時だった。もちろん報道陣は山積みになってしまった。

アイク「……………いってえ」

アイクが目覚めると森の中にいた。
どうやら無事にワープしたようだ。

アイクは眠っているメンバーを起こした。

プリン「危なかったでしゅ」

ワリオ「間一髪ってとこだな」

ウォッチ「マズハソノ人達ノ遺族ヲ探サナクテハナリマセンネ」

ソニック「そうみたいだな」

スネーク「しかし、この地域でも俺達の事を知っている人はほぼ全員だろう。

気をつけなくては……………」

その通りだ。誰かに見つかってしまつては、

報道陣に捕まるのと同じ事だ。

一人に見られれば、だんだんわんさかと集まってくる。

アイク「そうだな……………」

様々な思いを踏みしめ、12人は山を降りていった。

第13話 憎しみ

ドガガガガガガ!!

アサルトライフルの銃声が草原に響き渡る。

「あ……ああ……」

緑の動物は思いっきり地面に叩きつけられた。
少し手が動いていたが、しばらくすると、
息はしなくなっていた。

「ふっ、命知らずめが……」

ガノンドロフは死体を見つめてそう言い放った。
ザックの支給品を見たが、

使えそうなものは入っていなかった。
何も無いのを知ると、ザックを投げ捨て、草原を離れていった。

- 10分後 -

ガノンドロフとは別の人物が、死体の近くにいた。
彼女は死体のそばで泣き叫んでいる。

「そんな、なんでっ、ヨッシーが……」

彼女の名前はピーチ。

ヨッシーとはいい仲で、ヨッシーに乗りながら散歩に行ったこともあった。

そんなヨッシーが死んでしまっている光景を見て、
悲しみ、絶望、怒りがわき上がってくる。

ふと、横を見ると、赤い文字で名前が書かれていた。

「ガノンドロフ」

ピーチ「……………!!」

それを見たたんにとつもない怒りがこみ上げてきた。
聞いた事のない名前だが、ヨッシーが残した事は確かだ。

参加者名簿でガノンドロフを見る。

50ぐらいの変な奴だ。

こんな奴にヨッシーが殺されたと思うと、
居ても経ってもいられなくなる。

そばに落ちている赤コウラ。
相手に当たるまで追いかけるラッキーアイテム。

それを握り締め、涙をこらえながら男の向かった方へと歩いていった。

【ガノンドロフ/ゼルダの伝説シリーズ

健康状態：少し疲労

装備：アサルトライフル/残り23発（マガジン50発×2）

所持品：支給品一式

現在位置：H―5

基本行動方針：出会った参加者は誰だろうと殺す

第一行動方針：武器の搜索

最終行動方針：ゲームの優勝

備考：とくになし。」

【ピーチ／マリオシリーズ

健康状態：精神に疲労・怒り

装備：赤コウラ／3個

所持品：支給品一式・ナイフ・ボウガン／残り10発

現在位置：H―6

基本行動方針：ガノンドロフを探す

第一行動方針：仲間を集める

第二行動方針：強力な武器を探す

最終行動方針：ゲームの破壊

備考：ガノンドロフが行ったであろう方向に歩いています。」

【ヨッシー／マリオシリーズ 死亡確認

所持品：支給品一式・残りはピーチが回収】

【残り 47人】

第14話 赤と蛙

「……………」

赤がトレードマーク。

次自称スーパースターのマリオは、慎重に足を進めていた。
今彼がいるのは森の中。いっどこから攻撃されるか分からない状況だった。

ふと横を見ると、帽子を被った蛙が草に寝転んでいた。

こういう光景は見慣れているが、のんきに寝ているので明らかに殺意は感じない。

周りに注意しながら蛙に一步一步近づく。

マリオ「おい、何してんだ？」

蛙はびっくりしたように起き上がった。

そして小さい剣を構えてきた。

「だ、誰だっ！」

マリオ「お、落ち着け！敵じゃない！」

しばしの沈黙……………そして。

「なんだあ、てつきり殺しにきたのかと思ったよ」

マリオ「いや、こんな所で寝てるお前もどうかと思うが……」

「ちよつと眠かったんだよ。僕はスリッピー。よろしく」

マリオは少しあきれた。

下手したら殺されるかもしれないのに寝ていた。ため息が出る。

まあ、こういう事が一つぐらいなくちゃあ、こんなゲームやってられないが。

マリオ「俺はマリオだ。で、これからどうするんだ？」

スリッピー「そうだねえ、もう眠気もないから動こうかな」

スリッピーは少しだるそうに起き上がると、リュックから地図を出して地面に広げた。

ここはE-6。北に行った所に洞窟があるそうだ。

しばらく地図を眺めた後、マリオに問いかけた。

スリッピー「ねえ、マリオも一緒に行かない？1人より2人の方がいいよ」

マリオ「そうだな……これから何かあるかもしれない。だったら俺はいいぞ」

スリッピー「やったあ！じゃ、洞窟で身を潜めようよ」

マリオ「洞窟……まあ、いいんじゃないか？」

スリッピー「じゃあ出発だね！」

地図をしまい、一気に元気になった蛙。

だんだん和んでくる雰囲気にもリオも気が楽になる。

しかし、それでいいわけではない。ルイージやピーチ、そしてヨッシーやキノピオ、

デ이지ー達が心配であった。

洞窟で作戦を練らないとな…。

マリオ達が去って行った後、近くの草むらから誰かの影が出てきた。

その影はこう呟いた。

「最初の獲物はあいつらね。フフ…」

【マリオ/マリオシリーズ

健康状態：健康・少し安心

装備：なし

所持品：支給品一式・M92F/残り10発（マガジン10×3）

現在位置：E-6

基本行動方針：スリッピーとともに洞窟へ向かう

第一行動方針：仲間の搜索

第二行動方針：周囲に注意する

最終行動方針：ゲームの破壊

備考：後ろの存在に気づいていません。】

【スリッピー/スターフォックスシリーズ

健康状態：健康

装備：ソード（カービィのコピー能力、「ソード」の剣）

所持品：支給品一式・ハリセン

現在位置：E-6

基本行動方針：マリオと行動する

第一行動方針：フォックス達を探す

最終行動方針：みんなで脱出する

備考：マリオと同じく後ろの存在に気づいていません。】

・何者かが2人の後を追っています。

第14話 赤と蛙（後書き）

遅れた。

第15話 学校の裏にある山で

何気なく、トゥーンリンクが呟いた。

トゥーン「この町があるのは知ってたけど、なんでこの町で起こったんだろう…」

メンバーは山を降りながらその人達を探しているところだった。もちろん一般人や報道陣に見つかれば一日中この町を走り回る事になる。

トゥーンの疑問にロボットが答える。

ロボット「サア、分かりマセン…」

山の中腹辺りに着いた頃、思いついたようにアイクが言った。

アイク「それにしても12人は多すぎないか？ 絶対に見つかるぞ」
スネーク「確かに。俺のダンボールはともかく、他のは無理だろ」

ソニック「俺はこの足で行けるぜ。場所が分かればな」

レッド「僕はリザードンがあるから数人は乗せられるよ」

プリン「私は飛んでいけるわよ」

ウォッチ「わたしはペラペラで何とかいけます」

まとめると、約8人が一度に移動ができる人数と言う事だ。だが、もっと大事な事が分かっていない。

ワリオ「ってか、目的地はどこだよ。それが分からないと時間を喰うぞ」

スネーク「それなら俺にいい案がある」

サムス「いい案？」

スネークはそうだ。と言い放つと、そこに堂々と座り始めた。それにつられてメンバー達も地面に腰を下ろした。

スネーク「まず、誰か2人ぐらいが偵察に行く。その2人は目的の人らの居場所を突き止める」

ファルコン「なるほどな」

ロボット「デモ、誰が行くのデス力？」

そこが一番大事なところだ。

手がかかりが一つもない今、短時間でその人達の関係者を突き止めることはまず無理。

そうなるとこの山で野宿は必至になる――

食べるものも無ければ、寒さを防ぐ物も無いという訳だ。

カービーがいればコピー能力のコックで、何かは作れたのだが、

それに、ここに人が来ないという確率は低くは無い。

あまり人気のない様に思えるが、だからって必ずしも来ないとは限らないのだ。

ほとんどが腕組み状態だ。

そこへ、陽気なソニックが喋りだす。

ソニック「Oh、ここで飢え死ぬのはゴメンだぜ」

冗談で言っただつものの様だが、雰囲気が少し悪くなった様な気がし

た。

ソニックは慌てて口を手で押さえた。

トウーン「なるべく早く探した方が良いって訳ですね」

スネーク「ああ、そういう事になるな」

ソニック「Hey! それなら俺に任してくれよ。俊足で一気に発見するぜ!」

まずは一人決定した。

あともう1人いればほぼ決定になる。

足が速い。がメンバーの言葉だったらしく、目線は一斉にファルコンへ向けられる。

ファルコン「お、俺か? ……まあ、別に構わないが」

レッド「これで決定だね」

ソニック「それじゃあ行くなぜファルコン! let's goだ!」

ファルコンが立ち上がる前にソニックは自慢の足を回して行ってしまった。

慌ててファルコンも全速力で駆けていった。

アイク「あいつら、大丈夫なのか…」

サムス「あの2人は運がいいから。きっと笑顔で帰ってくるんじゃない?」

オリマー「まあ、そうですね」

笑顔で帰ってくることを祈りつつ、メンバー10人は寝場所の準備を始める。

ここで、女性達がある不満をもらした。

サムス「そうとなると、お風呂に入れないじゃない！　どうするのよ」

アイク「おいおい、お前は静香かよ……」

ウォッチ「静香って誰でス力？」

突然口に出した言葉にアイクは首をかしげる。

アイク「……さあ、知らね。俺にもよく分からない」
オリマー「まあ、よくある事ですよね」

よくあるのかどうかは知らないが、
お風呂は我慢しろとスネークが言い聞かせた。

プリン「そんなあ」

サムス「早く見つけないとお風呂に入れないわけね」

レッド「見つければ入れるって訳じゃないけど……まあいいや」

そんな中、ワリオが急かすように尋ねた。

ワリオ「おい、そんな事より寝床はどうするんだよ。木でも集めるのか？」

スネーク「ふむ…それが一番かもな」

トウーン「わぁーい！　早速集めよう！」

アイク「おいおい、これは遊びじゃないんだからな。あまり騒ぐなよ」

トウーン「分かってるよ」

そして、各自が木々を集めに行ったのであった。

第15話 学校の裏にある山で（後書き）

プリンの口調が変わってる？
そこはスルーで。

アイク「スルーでいいのか…」

レッド「というより何なの、このバトロワ組と僕達との話は」

うーん、何かマリオ達が死のゲームをしている中で、
表の世界でも戦いがあつた感じ。

レッド「無茶苦茶だね…」

アイク「まあ、せいぜい頑張るんだな」

うう、アイクに言われた……………

第16話 不信心

「うーん、どうしようか……」

約1時間この草原を歩き続けてきたが、一向に進展が無い。

誰かの悲鳴もなければ銃声も無い。誰とも会わない。

さっきまでたくさんいたのに、まさかここで僕1人だけなのか？と思う。

青い髪に力チューシャを付けた青年、マルスは途方に暮れていた。

マルス「ああ、もう誰でもいいから姿を見せてくれ……」

ババババババ！

突然背後から銃声が聞こえた。

とつさに近くの茂みに隠れるマルス。最初に出会ったのは狂った人なのかもしれない。

その人物に見つからないようにそつと草原を見渡す。

その中心に、見覚えのある赤い髪の青年が見えた。

マルス「あ、こんにちは」

とつさに彼にあいさつしようとしたが、やめた。

なぜなら、彼はVZ61マシンガンを構えて草原を進んでいたからだ。

その時マルスは、心の中で「ロイ？」と思ったが、誰なのかわからなかった。

ロ……ロイという人物は、
名前や姿は思い出せるがどういう仲だったのか思いつかない。

彼は呟きながらマシンガンを構えている。

ロイ「なんで僕がリストラされなくてはならないんだ！絶対に仕返ししてやる……」

彼はマルスに気づかず通り過ぎていったが、その後もマルスは動けなかった。

マルス「（何故だろう、僕はあの人を知っている気がする…それにリストラってどういう事だ？

元々何かの会社に入っていたのかな？）」

マルスは茂みの裏で彼について考えていた…。

・その頃 とある部屋・

「おい、ロイが突然参加してきたのは予想外だったが、ちゃんと記憶は消したのか？」

あの白い手袋が言った。

「いや、彼にはしていない」

男は小さく呟いた。

「何故だ？」

「現に彼はもう狂気で満ちている。そんな彼がわざわざ記憶が消されている仲間に気づくはずが無い。仮に正気を取り戻したら……」

「取り戻したらどうする？」

「もちろん、爆破だ」

その言葉が部屋に響く。

「相変わらず酷いな、お前は」

「おいおい、それはお前もだろ？俺のコピーを作って、ゲームに参加させているじゃないか」

「そうだな。それでもし正体がばれたら全員爆破だっけか」

「そうお前が言ったんだろ。どちらもお互い様だ。それにお前は全員爆破だろ」

どっちにしる酷い事には変わりないと思うのだが…。

「ははっ、確かに」

「全くだ。フフ……」

2人の会話はまだ続いていた。

【マルスノファイアーエムブレムシリーズ

健康状態：不信任

装備：なし

所持品：支給品一式・???（本人は確認済み）

現在位置：E-6

基本行動方針：周りに警戒

第一行動方針：ロイという人について考える

最終行動方針：ゲームを中止させる

備考：ロイについて必死に思い出しているようです。】

【ロイノファイアーエムブレムシリーズ

健康状態：少し疲労・狂気

装備：VZ61マシンガン／残り30発（マガジン30発×2）

所持品：支給品一式・マスターキー

現在位置：E-6

基本行動方針：xに出場したファイターを全て殺す

第一行動方針：ファイターの搜索

最終行動方針：ゲームの優勝

備考：謎の男のせいで、記憶は消されていません。】

第16話 不信感（後書き）

2ヶ月ぶりの投稿…。

しかも急展開の予感だし…。

何なんだこの小説は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7905h/>

スマドラバトルロワイヤル

2010年10月9日21時15分発行